中学生の学力低下

基礎学力の低下を実感している教師が抱える新たな問題は……

昨年『分数ができない大学生』という本が出版され、大きな話題を呼んだ。しかし、学力低下は何も大学生だけに起きている現象ではない。高校で、そして中学校でも、生徒の計算力や国語力の低下を危惧する声が上がっている。

学校改革が進み、学校では教える内容も指導の方法も急速に変わりつつある。そんな中、中学生の学力はどのように変化しているのだろうか。そして、そんな生徒を指導している教師は生徒の学力をどう見つめているのだろうか。

東京都の公立中学校の2年生の理科の授業でのこと。「電流」についての単元で、0・02×100という簡単な小数の計算問題が出てきた。

「こんなのすぐ解けちゃうよね」

そう言ってM教諭は、ある1人の生徒に解答を求めた。理科の成績はクラスでも上の下ぐらい。この程度の問題なら苦もなく答えられるはずだ。ところが生徒は小首を傾げたまま、こう言った。

「分かりません」

「あれ？」とM教諭は思った。やむを得ず次の生徒を指名したが、その生徒も答えられない。次々と生徒を当てていき、5人目でようやく正答が出た。休み時間、M教諭は数学の教師に相談に行った。

「一体どうなっているんですかね。きちんと取り組む気がないのかしら」

ところが数学の教師は、それほど驚いた表情もせず「そんなものかも知れないなあ」と感想を述べた。「中学校の数学は分数が中心だからね。小数点が出てきたから、戸惑ったんじゃないのかな」と言うのだ。

「分かりません」と返答した生徒も、分数なら即座に答えられたかも知れない。小数を分数に置き換えて考えることができず、小数が出てきた途端に凍りついたように思考をやめてしまった生徒。M教諭が生徒とのやり取りの中で、最近、最もショックだった出来事だ。

生活体験や反復学習の時間が不足

M教諭はここ数年、生徒の学力が坂道を転がるように落ちていると感じている。例えば、カタカナを満足に書けない生徒の増加。「マとア」「ソとン」「シとツ」を区別して書けない生徒が、クラスに5、6人はいると言う。また数年前、「地球の自転」を教えているときにも、こんなことがあった。

「太陽がどの方角から昇るかは知っているよね？」

M教諭は生徒に問い掛けた。もちろん基礎的な確認という意味での質問だ。ところが、生徒たちはにわかにざわつき、「北だ」「南だよ」「いや東だ」と言い合い始めたのだ。M教諭は途方に暮れた。中学生なら身に付いているはずの一般常識が、今の子どもには欠けている。M教諭はそう感じた。

なぜこうなったのだろうか。すぐに思い浮かぶ原因に、生活体験の不足が挙げられる。「草木や花の名前を知らない子どもが増えている」とM教諭は言う。かつては生活の中で自然と覚えていったことが、今の子どもには当たり前ではなくなっている。

計算力や国語力の低下については、小・中学校で反復学習をする時間を大幅に減らしていることが、大きな原因ではないか、とM教諭は分析する。

「私たちが小学生の頃は、嫌というほどドリル学習をやらされました。でも今、小学校では児童が自ら興味を持って学ぶことが大事で、ドリル学習に時間を費やすのは教育の本道ではない、という考え方が強いんです。児童に宿題を出す学校もかなり減っています。この傾向は中学校でも同じ。そのため、かつてなら反復学習で修得していたような基礎的な事項をきちんと身に付けられないまま、生徒は次の単元に進むことになるのです」

もちろんM教諭も「自ら興味を持って学ぶこと」は大事だと思っている。だが、その土台となる計算力や国語力がない限り、生徒は少し難しい計算式や文章に出合うと思考を止めてしまう。自らの興味を、さらに深い知識を得ようとする行動へと結び付けることができない。

「しかし難しいのは、何が基礎・基本なのか、ということなんです。太陽が東から昇るのを知らない生徒のことを嘆いていたら、数人の先生から『そんなことは知らなくても生きていける』と言われました。そのとき、私の中にある『これだけは教えなければ』と思う気持ちがぐらつきました」（M教諭）

かつて小・中学校の教師は、「これは知っていないと社会に出て困るよ。とにかく覚えなさい」と自信を持って言えたはずだ。しかし詰め込み教育への反動からか、教師は教え込むことに躊躇している。生徒が知るべき最低限必要な知識とは何か。知識伝達の場でもあったはずの学校が揺らいでいる。

学習意欲の低下も深刻

東京都の公立中学校で英語を教えるH教諭も、生徒の学力が落ち込んでいると感じている一人だ。H教諭は自分が担任しているクラスの生徒によく作文を書かせるが、句読点が打たれておらず、だらだらと文字を書き連ねた文章が数編あると言う。

また、H教諭は生徒の学力低下と同時に、学習意欲の低下も進んでいると言う。イスに座り教師の話をじっくり聞くことができない、説明したばかりのことをオウム返しのように質問する等々。まず生徒に学習への姿勢を身に付けさせなくては、学力低下に歯止めがかからないとH教諭は嘆く。

そこで、H教諭は年数回の単語力テストの際に、出題する単語をあらかじめ生徒に提示している。反復練習をして覚えさえすれば、たとえ成績が5段階で1の生徒でも高得点が取れる仕組みにすることで、達成感を体験させるわけだ。こうして生徒に基礎力が付いた時点で、今度は環境問題や著名人の生き方など、生徒が関心を持ちそうな英文を探し、原文のまま読ませるなどの試みもしている。

だがH教諭は「そんな授業をいつまで続けられるか」とこぼす。理由は教科時間数の削減だ。学校完全週5日制や「総合的な学習の時間」の導入、選択科目の増加により、既存の教科の時間数は減る。英語も「週3時間しか取れないのでは」と言う。

「時間数が削られれば、教科書以外に手を付ける余裕がなくなります。生徒の関心を引き出す指導力のある先生も、授業でその能力を発揮するのは難しいでしょう。『総合的な学習の時間』を効果的に機能させないと、学習意欲をなくした生徒をもっと生み出す恐れがあります」（H教諭）

今、学校は急速な変化の時期を迎えている。だが、その流れに追い付こうと必死になる前に、学校はそもそも生徒のために何を教える場なのか、じっくりと考える必要があるのではないだろうか。

授業内容や進め方の変化（教科別）

		国語（197）	社会（169）	数学（187）	理科（192）	外国語（193）
復習や導入	多くなっている	11.7	11.8	13.9	6.3	13.0
	減っている	45.7	34.3	39.0	41.7	29.5
練習や演習	多くなっている	18.8	7.7	13.9	6.8	22.3
	減っている	47.2	42.6	48.7	51.0	33.2
内容を膨らませた説明	多くなっている	11.2	19.5	15.5	12.0	20.2
	減っている	48.7	43.2	48.1	48.4	42.0
問題集や副教材	多くなっている	6.1	8.3	4.8	4.7	6.2
	減っている	48.7	43.2	49.2	43.8	49.2
宿題の量	多くなっている	12.2	6.5	10.2	6.8	13.5
	減っている	38.6	42.0	28.3	34.9	30.1
余談をする時間	多くなっている	3.6	4.7	3.7	1.0	2.6
	減っている	64.5	59.8	60.4	59.4	58.0

教科書を教えること以外の時間がなく、演習や宿題も減っていると感じている割合が高い。学習量が全体的に減っていることがうかがえる。　※数値は%（　）内はサンプル数
＊「第1回　学習指導基本調査報告書」中学校版（ベネッセ教育研究所発行）より